

日頃会社で親しくしている某君は昔から痔で悩んでいた。昨年の暮に思いきって手術を受けたので、小生も病院にお見舞を届けたことがあった。

先日、病氣全快ということで内祝を届けてくれた。事務所を受取ったので鞆の他にその荷物をぶら下げて帰宅した。その時の家内との会話はまったくおかしなものだった。

家内「あら、これは何ですか」

小生「ああ暮に手術した某君にお見舞を出した、そのお返しだ」

家内「ああ、香典返しですか」

小生「うん、それより腹減った。食事にしよう」

ということでその会話は終わった。

たまたま娘がその場に居合せてゲラゲラ笑いだした。

小生「何がおかしい」

娘「だって、パパとママの今の会話ったら、全然間違いだらけ、それでお互いに納得して、ああおかしい」

というわけである。思い直してみるとまったくその通りである。しかし、小生の小遣いから予定外の出費があって、その何割かに相当するものが家内の手に渡ったので、小遣いの追加を請求するぞという意味では事足りている。

こういうことは毎月1〜3回はあるのに、何時もこんなチグハグな会話を交しているのかなあ……夫婦の会話も古くなるとこんなものかも知れない。

しかし、会社の中でも似た例はいくらでもある。お互いに利害相反するような事柄についての話し合いなど、お互いに理解して妥当な解決策が得られたと思って別れても、後で文書を交わしてみたら、お互いに総論では意見は一致しているも各論においてはチグハグに理解していたというような経験は誰でもおもちのことと思う。

2〜3日前のことであった。秘書からお呼出しがあったので、××相談役が若い人の話が聞きたいと言っておられるので1時間程相手をしてほしいという注文であった。

××相談役はわが社の大長老で多分80才位になっていると思う。なるほど、大長老からみれば来年停年を迎える小生も若い者の内に入るのか……ブツブツ思いながらも1時間位ならと言ってお引受けした。

××相談役それでは“80年代の情報処理”というテーマでお話し申し上げます……とおしゃべりを始めた。最近のコンピュータのめざましい進歩、ソフトウェア危機の話、当社の技術計算やOR計算の話などご進講申し上げたが、種々なご下問や思い出話が入混って2時間半もお付き合いした。

その質問やお話の内容、新知識に対する驚き、まったく80才の老人とは思えない若々しいものであった。

“半導体技術の奇跡と言うが、その進歩の中心になっている Key は何ですか”

“これからはソフトウェアで勝負する時代だね”

“高速増殖炉の開発を PERT で管理したが、結局3年おくれた。NASA の専門家をよんで3000アクティビティのネットワークを作って、クリティカル・パス上の稟議書は即決するようなことをやったがダメだった。アメリカでうまくいって、日本ではうまくいかなかった、何故だろう。”

“経済企画庁で研究していた PPBS はその後どうなっているかね。”

等々、若い人と話がしたいと言われた意味ももうなづけた。

しかし、その後がふるっている。秘書が如何でしたかと問い掛けたら、“何処のメーカーの人だ”という返事だったそうである。“事前に人物紹介はしてあるのに、何を勘違いしているのかな、あの長老さんは”という連絡があった。

この反応は「メーカーの技術者のように技術的に明解なものであった」というほめ言葉か、「メーカーの受売りをしゃべった」という批評なのか、そのいずれかであろう。

ところでORの仕事をする場合には、こんな会話では困るわけだ。本音と建前、事象のカラクリなど正確に理解できるように話合わねばならない。

また、人間の会話は多少誤解をまねくから平和なのであって、お互いに思っていることが完全に伝わってしまうとするならば世の中は随分住みにくくなるだろう。

(M. M.)

会話のむずかしさ